言葉のない国

焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
言葉のない国

【Ｎコード】
Ｎ３７７３Ｚ

【作者名】
焔

【あらすじ】
おばあさんが言った。
「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」
「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかった……

～1日目～

おばあさんが言った。
「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」
「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかった…。」
「ある日、2人の旅人がこの「言葉のない国」にやってきた。
1人は大きな男で、もう1人はスタイルが良い女だった。
大きな鞄を1人ずつ持っていて、こんな話をしていたんだ。

男『おい、この国は噂通り言葉がないんだな。』
女『ホント不思議ねぇ、リク。』
男『そうだな、アイ。』

人々は聞いた事のない音を聞いてとってもビックリしたそうだ。
でもね、リクとアイの話は止む事がなく、人々はどんどんパニックになっていったんだ。

人々の様子に気付いた2人は、

リク『なぁ、アイ。もしかしたらここの国の人達は俺らを嫌ってないか？』
アイ『違うわよ。この国の人達は言葉というものを聞いたことがないから
　　ただ、戸惑っているだけよ。』
リク『そうか…。』
アイ『だから、そんな気にしなくてもいいのよ？』

リク『あぁ。』

と言い、しばらく無言になった…。
沈黙を破り、話し始めたのはアイだった。

アイ『何考えてるの？　リク。』
リク『ん、あぁ。どうすればこの国を変えられるかなぁ…って。』
アイ『なぁ～んだ。そんな事考えてたの？』
リク『そんな事ってなんだよ！』
アイ『まぁまぁ、落ち着いて。』
リク『フンッ！』
アイ『これは私の考えなんだけど、この国を変えるには
ここにいる人達に言葉を教えればいいのよ。』
リク『…。どうやって？』
アイ『ん～…。たとえば、ジェスチャーでみんなを集めて
学校みたいに1から教えるとか？』
リク『…一応やってみるか。』
アイ『でも今日はもう日が落ち始めているから、明日実行しましょう。』
リク『そうだな、じゃあ今日は寝床を探そう。』
アイ『…野宿は嫌よ。』
リク『そんな事言っても、言葉がなかったら泊めてもらうのは無理だろう。』
アイ『そうだけど…。』
リク『じゃあ、ベンチの上ならいいだろう。』
アイ『それならいい。』

そうして2人は、道のそばにあったベンチの上で1日目を終了した。」

～2日目～

「そして2日目、リクとアイはベンチの上で目を覚ました。
…国の人々に見つめられながら。

つまり、2人は日が高く昇ったころに目を覚ましたんだ。

リク『何で俺たちの周りに人が集まっているんだ？』
アイ『さぁ？』
リク『俺たちが珍しいからかな？』
アイ『たぶん、そうじゃない？
　でもこれだけ人が集まっていれば、学校が開(ひら)けるわね。』
リク『あぁ、そうだな。』
アイ『じゃあ早速始めましょうか！』
リク『おー！』

突然、大きな音がしたので人々の中には逃げ出してしまう人がいた。
残った人たちも2人に寄ろうとはしなかった。

リク&アイ『……。』
アイ『大声出しすぎちゃった？』
リク『たぶん…。』
アイ『学校開けるかしら？』
リク『やれるだけのことはしてみよう。』
アイ『そうね。』

2人はまずベンチから立ち上がり、『こちらに敵意はない。』とジェスチャーで伝えた。

人々は最初は頭を傾げたが、少し時間をおいてから分かったような態度を示したんだ。
その後、リクが

リク『僕たちはみなさんに言葉を教えたいのです。』

と言ったが、人々には伝わらなかった。

アイ『言葉を教えるって大変ね…。』
リク『そうだな。』
アイ『あ！』
リク『何かいい考えがあるのか？』
アイ『えぇ、言葉が伝わらなくても音楽なら伝わるんじゃない？』
リク『なるほど…。』
アイ『さっそくやってみましょう！』
リク『了解。』

そう言ってリクとアイは自分達の鞄からトランペットとフルートを取りだした。
みんな不思議そうに近づいてきて2人の周りに集まった。

アイ『じゃあ、いくわよ。』
リク『Ｏｋ！』

アイ＆ａｍｐ；リク『せーの！』
アイ＆ａｍｐ；リク『♪～ ？～ ？～ ？～ ？～ ？～ ？～ ？～ ♪～ ？～ ？～』

2人はとても美しい音色で国中を満たしたんだ。
人々は初めて聞く美しい音に聞き入っていた。

やがて音楽が終わると、盛大な拍手が起こった。

リク『どうやら、大成功みたいだな。』
アイ『やったー！』
リク『嬉しそうだな、アイ。』
アイ『えぇ、もちろんよ。　リクは嬉しくないの？』
リク『もちろん嬉しいさ！』
アイ『それは良かった。
　　で、これからどうする？』
リク『そうだな、この国の人達は音楽が好きな様子だから…』
アイ『音楽を教えながら、言葉も教える！　…でしょ？』
リク『俺が言おうと思ってたのに…。』
アイ『まぁまぁ、いいじゃない♪』
リク『ハァー…。』
アイ『じゃあ、他の楽器も出しましょ！』
リク『そうだな。』

2人は鞄から　クラリネット・ホルン・ユーホ・トロンボーン・アルトサックス　などなど
色々な楽器を出し、人々に見せた。

人々は色々な物が入っている鞄に興味を示した。
それに気付いたリクは、ゆっくりと

『　か　ば　ん　』

と発音した。
人々の中の1人は

『か、か　ばぁ　ぅ？』

と言った。

リク『！　アイ！今この人が…！』
アイ『？』
リク『喋ったんだ！』
アイ『えっ、嘘！』
リク『うそじゃないよ！』
アイ『やったわね！　リク！』
リク『あぁ！』

そうしてリクとアイは1日中人々が興味を示した物の名前を教えていったんだ。
日が暮れてきて、辺りが暗くなる頃にはヘトヘトになっていた。

リク『今日は疲れたな。』
アイ『そうね。　本当に疲れた…。』
リク『…　寝るか。』
アイ『えぇ。　おやすみなさい、リク。』
リク『おやすみ、アイ。』

…2日目もまたベンチの上で眠りに落ちた。」

～3日目～

「そして3日目の朝。
リクとアイは人々に　［あいさつ］　や　［気持ち］　など、
昨日教えていなかった言葉を熱心に教えていた。

リク『アイ、この国の人達は物覚えが早いな。』
アイ『ホント教えがいがあるわ。』
リク『そうだな。』

アイ『この様子なら明後日ぐらいにはこの国とお別れね…。』
リク『明後日！？　早すぎないか？』
アイ『だって、あまり長くここに居すぎたら別れが辛くなるじゃない。』
リク『…。』
アイ『私だってここから離れるのは寂しいわよ。　でも…　でも！』
リク『分かった、じゃあ明後日までにいっぱい思い出作ろう！』
アイ『…うん。』

そうして2人は、また人々に言葉を教えていった。
人々はそれを興味津々に聞いていた。

そうして言葉を教えてもらった人達は

『　みんな　リクとアイ　お礼　したい。　』

と言ったんだ。
それを聞いた2人は

『　よろこんで！　』

そう声をそろえて返した。
人々は

『　準備　する。　明日　まで　待って？　』

と言ったので
リクとアイは『いいよ。』と返した。
人々は嬉しそうに肯き、さっそく準備を始めようとしていた。

アイ『ねぇリク。　この国の人達は優しいわね。』
リク『そうだな。』
アイ『それで、私いいこと思いついたんだけど…。』
リク『ん？　何だ？』
アイ『あのね、私たち言葉は教えたけど
　この国や人々に名前をつけてないじゃない。』
リク『そういえば、そうだな。』
アイ『だから、お礼をしてもらった後に
　みんなに名前をつけようと思うんだけど…　どうかな？』
リク『いいと思う。　俺も手伝うよ。』
アイ『ありがとう！』

リク『じゃあまずは国の名前を決めないとな。』
アイ『そうね…。　言葉に関係してたほうがいいんじゃない？』
リク『あぁ、それじゃあ　言葉の国　っていうのはどうかな？』
アイ『そのままね（笑）』
リク『でもいいと思わないか？』
アイ『うん。そのままだけど、シンプルでいいと思うわ。』

リク『じゃあ決定！』

そうして国の名前を決めた2人は
一番積極的に話しかけてきた女の子には［セツ］
7歳ぐらいの双子には［リア］と［イク］
国の長老には［チョウ］　など、特徴から名前をつけていった。

いつのまにか日が落ちて、あたりが真っ暗になると
2人は昨日までと同じように、またベンチの上で眠りにおちたんだ。」

～4日目～

「この国に来てから4日目の朝…　出発の前日。
リクとアイは昨日、国の人に「お礼がしたい」と言われて喜んでいたんだが、
準備が忙しそうだったので朝から手伝っていたんだ。

リク『この様子なら昼までには準備が終わるな。』
アイ『そうね…。』
リク『ん？　アイどうしたんだ、気分でも悪いのか？』
アイ『違うわ。　ただ、明日になったらこの国ともお別れなんだな…って考えてたの。』
リク『…。　そうか。』
アイ『でも今日は楽しまなくっちゃね！』
リク『あぁ、そうだな！』

そしてリクが言ったとおり昼には準備が終わり、パーティは開かれた。
人々は教えてもらった言葉を使いながら楽しそうに会話をしていた。

アイ『リク、私達この国に来てよかったわね。』
リク『言葉を教える事ができたしな。』
アイ『ねぇ、もうそろそろあれ《・・》教えた方がいいんじゃない？』
リク『まぁ、そんなに焦るなよ。』
アイ『だって～。』
リク『もう少し時間が経ってから、な？』
アイ『分かったわよ。』

時間はあっという間に過ぎていき、だんだん空が赤く染まってきた頃に
２人は昨日決めていた事を人々に言った。

リク『みなさん、これから俺たちはこの国とあなたたちに名前をあげたいと思います。』
アイ『まず、この国の名前です。』
リク『この国の名前は…　』
リク＆ａｍｐ；アイ『　言葉の国　です。』
アイ『この名前は絶対に忘れないでください。』

人々『　言葉　の　国　？　』

アイ『そうです。　みなさんが生まれた国の名前です。』
リク『そして次にあなたたちの名前です。　自分の名前は忘れないでください。』
アイ『あなたの名前は…　』
リク『君の名前は…　』

そうして人々全員に名前を教えた２人は…

アイ『私達は明日この国を出発します。』
リク『短い時間でしたが、いままでありがとうございました。』

と告げた。
人々は『　いかないで　』『　ここに居て　』など次々に言ってきたが
２人は『もう決めたことなんです。　ごめんなさい。』と返した。

日が落ち、暗くなってきた時まで2人は人々を説得しつづけたんだ。
しぶしぶ了解をした人々は寂しそうにそれぞれの家へと帰って行った。

アイ『時間がかかっちゃったけど、みんな納得してくれて良かった。』
リク『…明日はみんなに見つからないように朝早くに出発しよう。』
アイ『えぇ、そうしましょう。』
リク『じゃあおやすみ。』
アイ『おやすみ。』

その後2人はすぐ眠りに落ちた。」

～5日目～（前書き）

今回の話で完結するので最後まで見てください＾＾

～5日目～

「5日目の朝、つまり出発の日を迎えたリクとアイは朝早くから出発の準備をしていた。

リク『とうとう出発だな。』
アイ『えぇ　…ちょっと寂しいわね。』
リク『そうだな。』
アイ『ねぇ、また何年か後にこの国に来ない？』
リク『いいや、それは駄目だ。』
アイ『…どうして？』
リク『またここに来たら別れるのがさらにつらくなるじゃないか。』
アイ『そうね…。』
リク『さあ、準備も出来たことだし　この国を出発しよう。』
アイ『…うん。』
リク『早く出発しないと国の人達を起こしてしまうからなぁ。』
アイ『ふふっ、もう遅いわよ。』
リク『えっ！？』

アイの指差した方には国中の人々が集まっていた。

アイ『昨日言ったこと、忘れてなかったみたいね。』
リク『まぁ、しょうがないか。』

チョウ『　リク　アイ　今　まで　ありが　とう　』

アイ『チョウ…。　私達もあなたたちにお礼を言わなくちゃね。』

リク&アイ『 ありがとう 』

そう言った2人の目には涙が浮かんでいた。
人々の中には号泣している人もいた。

リク『そろそろ行こう。』
アイ『分かった。』

リク&アイ『 …さようなら 』

2人はまっすぐ門に向かっていった。
その姿が見えなくなるまで人々は見送っていた。」

「その後…

言葉の国はリクとアイに教えてもらった言葉を使って、文字を発明したんだ。
文字が出来てからは本や手紙が流行った。
そして、この物語ができたんだよ。」

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3773z/

言葉のない国

2012年1月1日00時50分発行